

「唐丹希望基金」EEC 通信 125 号 2021-11
— 唐丹小中学生に届ける鎮魂と平和の思い —

心の旅「鎮魂と平和」

— 隙に込めた五つの感謝 —

唐丹中学校校長 八木 稔和



(1) 感謝する心の美しさ



今夏、1年間の延期を経て東京オリンピック、パラリンピックが開催されました。開催の是非について様々な意見が世間を騒がせ、新型コロナウイルス感染の収束がないままに開催できるのか、できないのかが直前まではっきりとせず、オリンピックに出場した多くの選手は心・技・体のコンディショニングにもものすごく苦勞したことと思います。しかし、その大きな困難を乗り越えて出場し、栄冠を手に入れた日本のメダリストたちは、競技直後のインタビューで「この大変な状況の中で、オリンピックを開催して下さったことに心から感謝します」と、自身の勝利の喜びよりもまずオリンピックが開催されたことへの感謝を伝えていました。その選手たちの心の在り方や品格が感じられる凛とした姿に胸が熱くなりました。自分のことよりも相手を思いやり敬意を表する精神、相手や周りに感謝する心の美しさにふれ、日本人としての誇りを改めて実感しました。

(2) いただいたご縁に感謝



東日本大震災から10年の月日が経った令和3年4月、私は新米校長として唐丹中学校に赴任するご縁をいただきました。見晴らしが良くおだやかで美しい唐丹湾を望む新校舎。純朴で明るく何事にも努力を惜しまず取り組む17人の生徒たち。日々生徒の良き成長を願い教育に情熱を燃やすチーム力抜群の教職員。学校をいつも温かく見守り何でも快く協力してくださる地域や家庭の皆様。これ以上無いくらいに恵まれたすばらしい環境で令和

3年度のスタートを切ることができました。おかげさまで、唐丹中に勤務するご縁をいただきやりのある充実した毎日を送ることができています。心から感謝の気持ちでいっぱいです。

(3) 支えてくださる皆様に感謝



唐丹中学校に着任し何日かして、唐丹希望基金代表の高舘千枝子さんに電話で着任のご挨拶を申し上げました。唐丹希望基金について菊地正道前校長から物心両面にわたるたくさんのご支援をいただいたことは伺っておりました。しかし、これまで歩まれてきた唐丹希望基金と学校との関わりや、この10年間の支援者の皆様からのどれほどのご支援が唐丹の子どもたちの心に

火を灯してくださったのか私は知る由もありません。ましてや、この未曾有の大災害から必死な思いで立ち上がり、前を向いて一步また一步と歩んで来られた唐丹に暮らす方々の生き様も知りません。お電話を差し上げた時、高舘さんは、唐丹希望基金の活動の経緯について熱く語ってくださいました。直接すぐにお目にかかることはできなくても学校や子どもたち、唐丹の地への深い愛情がひしひしと伝わり、その熱意に敬服いたしました。震災から10年が経過し、当初の唐丹希望基金の支援活動は一つの区切りを迎えられたそうです。しかし、唐丹の子どもたちが明るくたくましく育っていくことを願って今後も新たな形でのご支援を継続していただけることになりました。これまでの唐丹希望基金と学校とのつながりを礎として、「支援する」、「支援していただく」というつながりだけでなく、これから目指すべき共生の社会に向かうためのより良い関係を築いていけたらと考えています。その実現のために私たちができること、それはご支援していただいた皆様に「元気をお届けすること」に尽きると思います。そのためにも、子どもたちが日々輝いて元気にたくましく成長していけるよう、私たち教職員は心を一にして日々の教育活動に誠心誠意努めていく所存です。全国にいらっしゃる唐丹の子どもたちを応援してくださる皆様の存在は私たちの大きな励みです。皆様への感謝の気持ちを忘れずに、これからも唐丹中学校は前に進んでいきます。

(4) 生かされていることに感謝

新型コロナウイルスが世界中に猛威をふるい、間もなく2年になろうとしています。日々の生活



はさまざまな制限や感染拡大防止の動きが求められ、その影響は、経済状況はもちろん生活様式や人間関係にまで波及しました。学校も然り、様々な行事は中止や縮小が余儀なくされ、学習活動もさまざまな制約の中で行っています。これまで当たり前だったことが当たり前では通らない日常生活になりました。ワクチンを接種しても安心できない感染状況。全世界の人々がいつか終息する日が訪れるのを

待ちながら堪え忍んでいます。しかし、さまざまな我慢やストレスが尽きないこのような状況でも、毎日学校に通い生徒や教職員と笑顔であいさつを交わせること、やりがいを感じながら仕事ができること、そして何より日々健康に生活できていることは本当に有り難く幸せなことです。この世に生を受け日々生かされていることの有り難さを忘れず、生を全うできるよう努めていきたいと思っています。

(5) 罌 (ハソウ) に込めた感謝



唐丹希望基金より毎年ハソウを学校にご寄贈いただけることになりました。これまで唐丹希望基金を通じてご支援いただいたたくさんの方々の熱い思いや、唐丹希望基金の新たな一步を踏み出してくださった高館さんの思い、ご寄贈いただくハソウに込められている平和への祈りと鎮魂の思い…このたくさんの方々の思いの全てに対して私は上手く応えることはできません。只々感謝の気持ちでいっぱいです。

私は、人と人の心を過去から現在、そして現在から未来へとつないでいくのは感謝の心ではないかと思っています。何か自分に困難が生じたとき、だまって寄り添ってくれたり、そっと手をさしのべて力を貸してくれたり、励まして元気や勇気をくれたり、時には自分の過ちに気づかせてくれたり。私たち

は決して一人で生きられる存在ではなく、いつも周りの誰かに支えられながら生かされています。そして、それは決して当たり前のことではなく、本当に有り難いことであることを自覚し、いつでも「ありがとう」の感謝の心を忘れずに生きていきたいと心から思います。そんな感謝への思いをハソウの陶刻に込めさせていただきました。